高崎高校新聞

翠巒
Mini Press
第164号
2019/10/31

編集・発行
高崎高校新聞部

# 県総文祭特集

## 本校学芸部の活躍に期待

第25回群馬県高等学校総合文化祭（以下、県総文祭）総合開会式が11月2日（土）に群馬音楽センター及びシンフォニーホールで開催される。

県総文祭とは、県内の高校文化部に所属する生徒が一同に介する一大イベントである。そこでは、作品の展示や演技の披露を通して、今後の活動をより良いものにするために交流が行なわれる。

そんな県総文祭の開会を華々しく飾るのが、総合開会式である。全国大会に出場しているような部活動の演技や演奏、展示などを鑑賞でき、同年代の仲間の活躍を肌で感じることができる。本校からは、合唱部や鉄道研究部などが参加する。高校文化部の祭典にぜひ、足を運んでみてはどうだろうか。

元気に歌う合唱部

### 合唱部

合唱部の部長である布川佳昭君（2の7）に話を聞いた。

**―当日歌う曲について。**

まず、開会式で県内の高校すべての合唱部が合同で三曲披露する。その後、高崎、前橋、富岡、西邑楽、高崎経済大学附属の5校のうち、男性の合唱部員だけで構成した合唱団で「いざ立て戦人よ」とアレンジバージョンの「We WILL Rock You」の二曲を歌う。「いざ立て戦人よ」は男性の重厚な声により力強い曲になる。「We WILL Rock You」はみんなでリズムをとりながら歌うので、楽しく歌うことができる。

**―練習で気を付けていることは何か。**

「いざ立て戦人よ」は、男性合唱ではよく歌われる曲で、去年も歌った。この曲はリズムがとても大切で、遅れないように気を付けている。「We WILL Rock You」は、全員でリズムを取りながら歌うので、最初は苦戦した。また、本来は合唱用の曲ではなく、高めの音で歌わなくてはいけない箇所もあり、ベース担当の自分には難しい曲だ。自分たちの課題を改善できるように、日々練習している。

**―高高合唱部の良さは何か。**

人数が少ないので、部員全員の仲が良く、遠慮せずに意見が言える。そのおかげで皆で素晴らしい曲を作ることができる。

**―今回の目標は何か。**

今回は、来場者を楽しませることも中心に考えているので、自分たちがリズムを取ることで、お客様にも楽しんでいただけるように頑張りたいと思う。

（松本）

### 鉄道研究部

鉄道研究部部長の相川隆太郎君（2の2）にインタビューを行なった。

**―今回のジオラマのテーマは。**

群馬の名所や自然、街並みなど馴染みの深い場所を再現した。翠巒祭でも多くの人が見てくれた模型だ。

**―いつ頃から構想を練り始めたか。**

去年の冬休みから部員全員で考え始めた。再現しようと案に挙がった場所に実際に見に行き、冬休み中に視察を行なった。

**―現地での視察で気を付けたことは。**

現地の雰囲気を体感し、建物の形を残すために写真を忘れずに撮った。

**―去年のジオラマとの違いは。**

山を多くし、自然を増やした。また、駅前の建物を充実させ、忠実さにもこだわって作成した。

**―今回の制作で難しかったところは。**

回転を描くように建設されているループトンネルを制作するのが大変だった。

**―今回のジオラマでのポイントは。**

ループトンネルだと思う。上毛かるたの読み札などにより認知度が高いので、たくさんの人に見てもらいたい。また、高崎駅やその周辺の街並みも見どころになっている。スケールが大きいにも関わらず、どれも手作りであることもポイントだ。

**―今後の模型で取り入れたい景色や場所はどこか。**

日本北方の海を取り上げようと思っている。具体的にはまだ言えないが、良いものを作っていきたい。

（五十嵐）

忠実に再現された鉄道模型

## 紙面紹介

〈表面〉
・総文祭
・和太鼓部

〈裏面〉
・バスケット部
・空手道部
・軟式野球部

## 大舞台で刺激受ける
## 和太鼓部　漢組

9月20日に東京スタジアムで行なわれたラグビーワールドカップのオープニングセレモニーで高高の和太鼓部「15代目漢組」が演奏を披露した。

今回のイベントについて部長の北爪悠太君（2の6）は、「自分たちは2日前に東京に入り、リハーサルをした。当日はプロの鬼太鼓座（おんでこざ）と鼓童（こどう）の方々とコラボして演奏した。会場は多くの人で賑わっていたが、緊張はしなかった」と話した。

また、今後の展望について、「オープニングセレモニーという大きなイベントでプロの方々と一緒に演奏できたことはとても貴重な体験だ。たくさんの刺激を受けたので、これから一人前の演者になれるように精一杯頑張りたい」と語った。

（萩原）

和太鼓部の部員たち

## NOTE

10月12日に今年最も勢力が強いとされる台風19号が関東地方を直撃した。この台風によって各地で河川が氾濫し、大雨特別警報や避難勧告が発令され群馬県では、ほぼ全域で警戒レベル5であった。この台風は、日本で4600人もの死者を出した過去最大級の「伊勢湾台風」に、気圧や瞬間風速などが匹敵すると言われている▼「伊勢湾台風」とは、昭和34年9月20日マーシャル諸島付近で発生した熱帯低気圧が発達し、日本を通過した台風である。勢力が非常に強く、暴風域も広かった。台風の影響は全国に及んだが、特に愛知県に多くの被害をもたらし、死者と行方不明者合わせて3300人以上にまでのぼった。これは暴風雨の中、高潮によって短時間で大規模な浸水が起きたことが主な原因とされている▼今回の台風により、関東甲信地区では冠水し、多摩川などの堤防が決壊、氾濫してしまった。台風が通り過ぎた後でも、断水が続き、生活多くの支障を及ぼした。また、ダムの緊急放流をするなど、過去にないほど危険な状況に陥っている▼しかし、メディアが事前に今回の台風の勢力が強いということを放送し、「命を守る行動」をとるように促していたことや、地域間での協力などにより、多くの命が救われたことも事実だろう。現在では自衛隊派遣もなされ、復興へ向かっている。とにかく今は、被災地の一刻も早い復興を望むばかりである。

（松本）

紙面割担当　表・根岸　裏・五十嵐

## 県秋季関東予選

# 軟式野球　高商に惜敗

大きく振りかぶる高高の高橋投手

9月28日、安中市で秋季関東地区高校軟式野球大会県予選が行なわれた。高高は、夏の大会の決勝戦で対戦した高崎商業（以下、高商）との負けられない試合だった。結果は、1対3で高高が惜しくも敗れた。

1回の表で1アウト、2・3塁のピンチを迎えた高高は2点を失った。その後満塁を迎えたものの、何とか立て直した。4回の裏、高高が初のヒットで流れを手繰り寄せ、初得点をあげた。しかし、6回の裏、エラーが続いたことで1点を許した。最終回までに何度か得点のチャンスを作ったものの、高商のレベルの高い守備に阻まれ、高高は1得点のまま、試合は幕を閉じた。

部長の伊橋湧君（2の7）とキャプテンの中野大輝君（2の3）は、「高商は、プレーの1つ1つに無駄がなく、とてもレベルの高いチームだった。関東大会優勝校が相手ということもあってか、チーム全体の動きが委縮してしまう部分が多かった」と試合を振り返った。

また、「攻撃面についてはバントの正確性をもっと上げること。加えて、高高が武器としているストライクエンドランの成功率を上げること。守備面では、1つのミスから、立て続けにエラーが発生してしまったことが、今大会で見つかった課題点だ」と反省点を語った。

「これからは練習試合が続いていく。今大会で見つかった課題を1つ1つ残りの練習試合の中で修正していきたい。冬季は基礎となる技術をしっかりと身に付けて、冬季大会で県優勝を果たしたい」と今後の抱負を力強く話した。（関原）

# バスケットボール部　一致団結

## リーグ戦勝利に向けて

現在バスケットボール部は、平日は2時間から2時間半、休日は3時間程度活動している。また、「練習の成果を試し、実戦経験を積む」ために年末や年度末の長期休業を利用し県内外の様々なチームと練習試合にも取り組んでいる。同部は、11月の県内チーム同士でのリーグ戦や新人戦などを控えている。そこで、顧問の渡部健一郎先生に取材を行なった。

「前の代から公式戦に頻繁に出ていた選手が少なく、全体的に実践不足である。練習試合などで試合を経験することで日々の練習の成果を感じるとともに、本番に向けて調整してほしい」と先生は話す。

また、「選手たちがより自主性を重んじる」ことも大切であるという。「定期戦の部対抗では、チームとしてやってきたことを十分に発揮できずにいた。実戦で自ら考えて動けるように、最近では選手たち自身がコミュニケーションをとって、練習メニューを考えるなどしている」。

また、「今の代は1人1人が真摯に部活動に取り組んでおり、とても雰囲気の良い活動になっている。チームスポーツなので、これからもこの流れを維持し、互いに切磋琢磨してほしい」と語った。

最後に、「先代がベスト8入賞を果たして、シード権を獲得してくれたので、今の代でもベスト8に入れるよう頑張ってほしい。また、目先のことに左右されることなく立ち向かい、2年生が引退の時には先輩の伝統を受け継いでほしい。以前、県総体で高高が総合1位を獲得した年は、それぞれの部活動が個々で頑張っていただけでなく、別々の部活動同士が良い意味で互いに刺激しあっていた。総体の結果に囚われすぎる必要はないが、部活動全体の活性化のためにも、バスケットボール部としてだけでなく運動部の一員としての自覚を持って活動していたい」と話した。（根岸）

シュートを決める高高の選手

# 空手道部　日々精進

## 課題修正のために

空手道部は、10月20日にALSOKぐんま武道館で行なわれる新人大会に向けて、週末の試合や日々の練習を通して、技術の向上に努めている。

同部は、9月に行なわれた1、2年生大会や、群馬県練成大会にも出場した。放課後の練習や大会で得た課題について、3人の部員に話を聞いた。

練習について、部長の御供大剛龍君（2の5）は「今年度はまだ公式大会での優勝ができていないので、それを意識して練習をしている」、小板橋海翔君（1の2）は「熱く、元気に、軽やかに、そして活発に練習を行なっている。まずは、公式大会で、1勝することを目標に頑張っている」、石田悠君（1の6）は「怪我と隣り合わせのスポーツなので注意して行なっている。空手は未経験なので、まずは周りのレベルについていくことを意識している。また、部長からのアドバイスを大切にしている」とそれぞれ語った。

今までの試合で得られた課題について、御供君は「これからは、実践練習を積極的に取り入れることを心がけようと思った」、小板橋君は「対戦相手を恐れず、場馴れをすることが課題だ」、石田君は「蹴り技の精度を上げることが課題だ。他の選手の試合を見て、レベルを上げていきたい」とそれぞれ話した。（五十嵐）

練習に励む部員

連載

# 應援部と吹奏楽部

## 心を合わせての演奏

集会時における高高の校歌と翠巒は應援部だけでなく、吹奏楽部も伴奏をしている。これについて、應援部部長の根岸歩夢君（2の5）と吹奏楽部の岩渕智也君（1の1）に話を聞いた。

根岸君は、「主に始業式と終業式で演奏しているが、一緒に演奏するようになったのはだいぶ前からだと思う。硬式野球部の応援の時も、試合を盛り上げるために行なっている」と語った。練習について、「期間は限られているので、課題は多くある。應援部の太鼓のリズムと吹奏楽部の演奏の2つが合わないことだ。時間を効率的に使いたい」と述べた。また、吹奏楽部に対して、「ともに校歌と翠巒の演奏をしてくれてありがたい」と述べた。

岩渕君は定期戦中は應援部の臨時部員として活躍した。應援部と演奏することについて、「校歌と翠巒をともに演奏することで、メロディーが混ざり合い、良い雰囲気になる。これによって、一般生が歌いやすくなれば良いと思う」。演奏に関しては、「應援部の太鼓が合うように心掛けている。しかし、ステージと体育館の端では距離があるため、互いにテンポを把握しづらい。特に、翠巒は独特のテンポなので、演奏を合わせるのが難しい」と語った。

最後に一般生に対して、「大きな声で歌ってくれると演奏を合わせやすいのでお願いしたい」と口にした。両部は、校歌と翠巒をより良くしようと努力している。なかには、歌いにくいと思う生徒もいるかもしれない。しかし、より良いものにするためには全校生徒の協力が不可欠だ。個人が声を出すことで伝統は根付き、次世代にも受け継がれていくだろう。（鈴木）